



「旭川校特別ニーズ教育センター」の活動、1999年 北海道教育大学旭川校障害児教育研究室付属

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学教育学部旭川校特殊教育特別専攻科障害 児教育研究室 公開日: 2017-07-27 キーワード: 作成者: 古川, 宇一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008083

「旭川校特別ニーズ教育センター」の活動、1999年
北海道教育大学旭川校障害児教育研究室付属

The Annual Report of Special Needs Education Center, Asahikawa Campus,
Hokkaido University of Education, 1999

古川 宇一 (Uichi Furukawa)*

1998年1月、3ヶ年の試行期間を設定して発足した「旭川校特別ニーズ教育センター」は2年目を経過した。センターとはいえ専任職員はいないが、障害児教育研究室スタッフ、学外スタッフ、特殊教育特別専攻科生による共同研究、個別臨床、学習会活動などを継続している。親の学習会である「旭川縦につなぐ会」の活動には「父親の会」も発足し、親の行う家庭教育に成長が見られた。また、科研費による TEACCH プログラム 3ヶ年研究が始まり、TEACCH センターの機能充実が求められ、ホームページによる活動が開始される。音楽運動療法についても親・セラピストとの共同研究が継続している。

(キーワード: SNE 教育臨床センター 障害児 TEACCH センター)

1. 目的

「旭川校特別ニーズ教育センター（北海道教育大学旭川校障害児教育研究室付属）」（以下 ASNEC: Asahikawa Special Needs Education Center）と略称する）は、自閉症、不登校、学習障害など、情緒面、対人関係面、学習面での固有の教育ニーズをもつ子ども、知的障害、重症心身障害、さらに視覚障害、聴覚障害などの固有の教育ニーズをもつ人たちに、臨床活動、相談活動を行うことをめざすセンターである。

活動は、子どもに限らず、ニーズをもつ人々、親、教育・医療・福祉関係者もともに行う学習活動を含む。また、地域の情報センター、え研究センターとしての機能を担う。

2. 1999年の活動

(1) 共同研究

① 文部省科学研究費による共同研究

文部省科研費による「地域社会における自閉

症・知的障害児者の生涯ケアに関する実践的研究(Ⅱ)ー幼児教育・学校教育・医療・施設ケアにおける TEACCH プログラムの展開ー」第2次3ヶ年計画: 古川宇一(北海道教育大学旭川校)、木村健一郎(北海道教育大学函館校)、長 和彦(旭川肢体不自由児総合療育センター)、大場公孝(おしまコロニー)が始まり、ASNECにおいて TEACCH センター機能を果たすことが求められる。すなわち、TEACCH プログラムにかかわって、評価、IEP 作成、臨床指導、相談活動、研修活動である。また、ホームページによる相談活動、研修活動のために開設準備中である。

発達評価については、PEP-R の発達検査を3ケース行った。

② 旭川市立大有小学校

大有小学校知的障害学級「松かさ学級」と教育大学障害児教育研究室、長 和彦氏との共同研究は1995年以来、5年目になり、本年は言語遅滞、自閉症の二つの事例について共同研究を行った。

* 北海道教育大学旭川校

③旭川市立北星中学校

北星中学校知的障害学級との共同研究は1996年以來4年目となり、本年度は賀川由紀を中心に自閉症児のバス乗車指導が行われた。96年、石川順一、97年、山口健、98年、中川原文香のTEACCHのアイデアを用いた実践が継続され、成果を上げている。

④自閉的障害幼児に関する共同研究

旭川市立愛育センターみどり学園との共同研究は、1992年以來、TEACCHプログラムの共同研究として行ってきた。本年はTEACCHプログラムに関する研修を行った。

また、母子通園センターとの共同研究として他動傾向のある幼児の事例研究を野田左希子を中心に行った。

⑤情緒障害学級退級児の予後調査を猪俣みゆきを中心に行い、通級システムの情緒学級の高い評価を確認した。また、学校教育終了後も相談の場を求める強いニーズが示された。

⑥共同研究に本年から東川養護学校、鷹栖養護学校が加わり、地域ケア、生涯ケアに果たす養護学校役割に関して研究を行う。

①「21世紀の特殊教育を考える」プロジェクト

本プロジェクトが有志によって、1999年2月に活動を始めている。2000年中にまとめを作成する予定である。基本的な理念として、インクルージョン、あるいはSpecial Needs Educationをおく。インクルージョン理念は、世界の趨勢を占め、日本手をつなぐ育成会では運動の基本理念としている。この理念をもとに特殊教育、学校教育を考えると、現在の子どもをめぐる多くの課題の解決の糸口となるのではなかろうか。

(2) 旭川縦につなぐ会の活動

旭川における障害児教育関係者の会である「旭川縦につなぐ会」は、母親の学習会が月例で行われ、家庭学習法を中心とした実践と学習がすすめられている。また、父親バージョンである「父子キャンプ活動」は本年度3年目を迎

え、嵐山ビジターセンターのご好意でセンター施設をお借りし、7月10日1泊キャンプを行った。3年目(3回目)のキャンプとなり経験の蓄積が感じられた。さらに、父親もキャンプだけではなく、将来を展望した学習会を始めようということで、同じ嵐山ビジターセンターにおいて1999年11月27日、瀬川真砂子先生を講師にお迎えして、グループホームに関する勉強会を行った。大半の父親は宿泊し、さらに研修を重ねた。これからも年、数回の学習会を予定している。

(3) ASNEC 関連の活動

①音楽運動療法に関する実践・研究(寺田真澄)

昨年に引き続き、音楽運動療法の月例会が続けられている。継続研究として、北海道教育大学教育実践総合センターの研究に参加し、母親の療法への参与と意識変容に関する事例研究がまとめられた。荻野ひとみによるボールエクササイズが音楽運動療法にとりいれられ、家庭での音楽運動療法に道が開かれた。

②ボールエクササイズ(荻野ひとみ)

③マーメイドキッズ(水泳教室)(島田英子)

④エルム共同作業所・乗馬療法(榊澤美紀)

(4) 研究会、講演会、研修会、研究報告

① 公開研究会活動として、1999年2月12日13日の2日にわたって、第18回北海道教育大学情緒障害教育研究論文発表会・第5回北海道教育大学情緒障害教育学会(第34回北海道教育大学情緒障害教育研究会)、80余名の参加者を得て開催された。ご両親、教育・福祉・医療関係者の参加を得て活発な質疑が行われた。

また、98年8月1日(日)第33回北海道99教育大学情緒障害教育研究会が開催された。

②講演会：リタ・ジョーダン先生(バーミンガム大学)「イギリスにおける自閉症スペクトラム児童の教育」、北海道教育大学旭川校教育棟

③学習会

・ 北海道重複障害教育研究会月例会

菅原康之氏（旭川校情緒課程3期生）が会長である北海道重複障害教育研究会の月例会をSNEセンターを会場にして開催されている。

・ 障害幼児通園施設みどり学園スタッフとの学習会を開催。

④北海道教育大学旭川校障害児教育研究室発行の「情緒障害教育研究紀要第18号」が上記研究活動論文を載せて98年2月に発行された。同第19号は99年2月に発行される予定

3. 2000年度の展望

- (1) TEACCHセンター機能の充実
- (2) ホームページの開設
- (3) SNE児のうち通常学級のLD児ADHD児の事例研究

4. スタッフ

①学内スタッフ

- 古川宇一（障害児教育講座・専任）
- 末岡一伯（障害児教育講座・兼任）
- 内島貞雄（障害児教育講座・兼任）
- 若原直樹（障害児教育講座・兼任）
- 今川民雄（障害児教育講座・講義担当）

②学外スタッフ

- 情緒・自閉症（含む学習障害）
外山悦子・阿部和夫
- 学習障害（含む情緒・自閉）
桜井清隆・松田美智子・津川信之・小泉雅彦
- 知的障害
高橋勝利・菅原康之・中保 仁
- 登校拒否関係
武田公孝・三浦 努・鳴川啓子・林 耕司
- 幼児
瀬川真砂子・横山武子
- 言語
桜井美知子
- (5) 共同研究
旭川市立愛育センターみどり学園
旭川市立母子通園センター
旭川市立大有小学校
旭川市立北星中学校
北海道療育園
北海道立旭川肢体不自由児総合療育センター
おしまコロニー
北海道教育大学函館校
旭川アルム共同作業所